

「単方向 TEA」から「双方向 TEA」を開発する試み 不登校経験家族を事例として

発行：2023 年 9 月 9 日
[掲載決定: 2023 年 3 月 9 日]

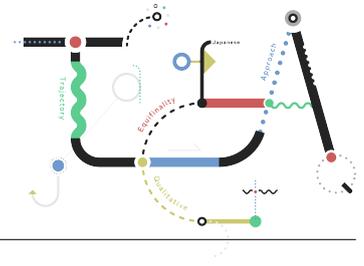
豊田 香 (拓殖大学)
卒田 卓也 (近畿大学)

概 要

本研究は、不登校経験家族（子・母・父）を事例とし、従来の「単方向 TEA」を応用して複眼的視点から相互のやり取りをプロセスで記述する分析手法「双方向 TEA」の開発を試みたものである。具体的には、3 者それぞれの TEM / TLMG 図を作成し、それらを重ね合わせ、全体像を示す双方向 TEA 図と家族システムを示す双方向 TEM / TLMG 図の作成を試みた。可視化には、受信と発信という双方向な相互作用を示す双方向 SD と双方向 SG という新たな概念と記述方法を提示した。分析の結果、家族システムの変容が 6 つの時期区分（第 1 期：異物としての不登校未満，第 2 期：排除したいができない不登校，第 3 期：扱わない不登校，第 4 期：新しい一体感という不登校の恩恵，第 5 期：扱える不登校，第 6 期：不登校を取り込んだ日常）として示された。双方向 TEA という分析手法は、心理臨床実践におけるナラティブ・セラピーへの応用として多様な支援策を模索する支援者を中心に有用ではないかと結論づけた。

キーワード：双方向 TEA，複眼的視点，家族システム，ナラティブ・セラピー，不登校

連絡先：豊田 香 (E-mail: katoyoda62@gmail.com)



Attempt to Develop a Bidirectional TEA from a Unidirectional TEA:

Case Study on a Family who Experienced Truancy

Published: September 9, 2023

[Accepted: March 9, 2023]

TOYODA Kaori (TAKUSHOKU UNIVERSITY)

SOTTA Takuya (KINDAI UNIVERSITY)

Abstract

This study aimed to develop an analytical method called *bidirectional TEA*, which describes mutual interactions in terms of processes from a multifaceted perspective by applying the conventional *unidirectional TEA* to a case study of a family (child, mother, and father) who experienced truancy. Specifically, it endeavored to create a TEM/TLMG diagram for each of the three parties and superimpose them to create an interactive TEA diagram that presents the overall picture and an interactive TEM/TLMG diagram that depicts the family system. For visualization, we proposed new concepts and methods of description, such as bidirectional SD and SG, which indicate the bidirectional interactions between reception and transmission. The results demonstrated the transformation of the family system across six time periods (first: less than truancy as a foreign substance; second: truancy to be eliminated but not possible; third: truancy not to be handled; fourth: benefits of truancy in the form of a new sense of unity; fifth: truancy to be handled; and sixth: daily life incorporating truancy). The study concluded that the analytical method of bidirectional TEA may be useful as an application to narrative therapy in clinical psychology practice, especially for supporters who are seeking various support measures.

Keywords: bidirectional TEA, multifaceted perspectives, family system,
narrative therapy, truancy

Correspondence concerning this article should be sent to:
TOYODA Kaori (E-mail: katoyoda62@gmail.com).

問題と目的

1. 問題

TEA (Trajectory Equifinality Approach : 複線経路等至性アプローチ、付表参照) が質的研究法として研究者に広く周知されたのは、サトウ (2009) による『TEMではじめる質的研究——時間とプロセスを扱う研究をめざして』からといえるかもしれない。その後、TEA は学際的に使用・援用され始め、2020 年までに CiNii での掲載論文として 187 本が発表されている (表 1)。この 187 本の傾向をみると、調査対象者が 1 名から最大 23 名の範囲で、そのほとんどが、研究者が設定する等至点 (EFP: Equifinality Point) と関連が深い、ある 1 つの類似する出来事を経験した人を研究にご招待 (HSI: Historically Structured Inviting) し、その人たちが、環

境要因を受けながら人生選択をする在り様を SD (Social Direction : 社会的方向づけ) / SG (Social Guidance : 社会的助勢) という構成概念を用いて複線経路で可視化したものである。環境要因を記述する SD と SG は、受動的なものとして矢印が描かれるという意味で単方向であり、ある事象が同様の立場 (側面) から可視化されるという意味でも単方向であるので、ここではこれを「単方向 TEA」と呼びたいと思う。

この CiNii に掲載された 187 本の TEA 論文の領域は表 1 が示すように、「家族」と関係が深いものが多くみられる。例えば、不登校やひきこもりなどは、不登校やひきこもる当事者だけでなく、彼らを見守り支援する親・きょうだい・祖父母・親戚などを研究対象とし、それぞれの立場で経験する人生選択の経路が複線で可視化されている。不登校研究では、不登校当事者 7 名をとらえた研究 (新川・杉山・熊谷・桂川・熊野・小関, 2020) や、母親 6 名の奮闘プロセスを 3 つの時期区分で提示したものがあ (河合, 2012)。また、ひきこもり研究では、ひきこもりをするきょうだいをもつ人 (同胞) 3 名の視点

表 1 TEA 分析による主な CiNii 論文の領域別・年代別推移

研究領域	本数	CiNii論文掲載年											
		2005-2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
保育	44		1	1	2	4	6	1	5	4	7	9	4
家族 (不登校・ひきこもり・兄弟・結婚など)	25	1		1	1	2	1	2	2	1	5	5	4
人生の出来事	24	4		4		1	3	3	4	2	3		4
日本語教育/学習・外国籍者	21									2	7	7	5
小・中・高の学校教育・教師教育・学習研究	21				1	1			2	3	5	7	2
スポーツ	8				1	1	1	1	1	1			2
障がい者関係	7							1			3	3	
キャリア (教師以外)	7							1	1	3			2
医療・看護	7	2	1							1		1	2
地域・福祉	7								2	1	3	1	3
質的方法論	6	1			2				1		1	1	
大学 (生)	5				1			1			1	2	
ビジネス	2				1							1	
論文本数 (合計)	187	8	2	6	9	9	11	10	18	18	35	37	24

出典：CiNiiに掲載されている論文 (2021年3月1日まで) を領域別・年代別に分類。論文検索のキーワードは、「Trajectory Equifinality Approach」(56本)、「Trajectory Equifinality Model」(128本)、「複線経路等至性アプローチ」(48本)、「TEM図」(11本)、「複線経路・等至性」(172本)、「発生の三層モデル」(7本)、「TEA分析」(3本)を使用。そこから重複する論文を整理し、合計187本となった。この検索で抽出されないTEAを用いた論文は、ここには含まれない。タイトルを中心に調査対象者と調査内容などから領域を分類した。

から、彼らが家族から自立するプロセスを可視化する研究（和田，2016）や、親の視点から、子がひきこもりという危機的状态を脱するプロセスを可視化する研究がある（花嶋，2018）。

このように研究が蓄積されつつある TEA は、その特徴として研究対象者が 1 名であっても、選択した径路だけでなく、選択しなかった複数の径路を視野に入れる枠組みをもつことから、主に医療、教育、福祉などの臨床場面で調査協力が得にくい、ともすると一人の協力者を得るのがやっとというような希少な事象に光を当てることを可能にした。当事者の視点に寄り添い、当事者が経験した、また経験しなかった人生経路を言語化かつ可視化し、研究の遡上に上げたのである。この点は、TEA の学術的貢献として大いに評価される側面であり、TEA による論文の蓄積が進んだ 1 つの要因ともいえよう。

しかしその一方で、家族と密接に関わり合う不登校やひきこもりなどの社会問題を扱う場合、その当事者が埋め込まれている環境を含めて、複眼的かつ相互作用を視野に入れる研究手法としては、TEA はまだ発展途上にある。ますます価値観や生き方が多様化する中で、支援者は複雑に絡み合う問題状況を、個別と全体、そして立場の異なる個別間といった複眼的視点で理解する必要に迫られているのが現状であろう。このような新たな支援の在り方を見出す必要性について、卒田（2019）は、不登校研究上では、不登校の子どもと向き合う母親研究を進めつつも、子や父を含めた同一家族のそれぞれの視点から、全体をシステム的に理解する重要性を述べている。例えば、不登校問題を解決できた事例や、解決できずにいる事例など、家族システムの事例を知ることが支援者にとっては貴重な情報になるというのである。不登校と一言にいても、その向き合い方は家族全体としては多様であり、個々のアクターが埋め込まれた状況を理解することなしには、より踏み込んだ支援の在り方を見出すことは難しいと述べている。また、ひきこもりの家族研究では、心理実践や家族療法の領域で家族全体を複眼的に捉えることが支援者にとって有効であるといわれている。問題状況に埋め込まれた個人を社会システムの問題へとつなげ、ソーシャルワークを巻き込んだ議論へと展開する可能性があるからである（廣瀬，2018；河合，2012；中釜，2010；曾山・中釜，2012 など）。

このような必要性を背景に、単方向 TEA に複眼的視点を取り込もうとした意欲的な研究はこれまでに数は少ないがいくつかあった。例えば、青野（2016）は、母親と娘のライフコースを同じ非可逆的時間において TEM（Trajectory Equifinality Modeling：複線径路等至性モ

デリング）図で重ね合わせて可視化している。時期区分や直接的なやり取りなどの双方向性については可視化には至らないが、双方の関係性について考察を加えている点は示唆に富む。また、保育領域では、上村（2018）が、保育者と子どもの関係構築プロセスを一枚の TEM 図内で同時並行的に描いている。両者の相互関係の在り様を可視化する萌芽的試みではあるが、広く汎用性の高い分析手法としては、まだ開発段階であると課題を述べている。

このように、TEA は、ある類似した出来事を、異なる立場から複眼的に理解するための分析ツールとしては、まだ発展途上にある。各アクターの双方向のやり取りがある種の環境要因と捉えつつ、その双方向な相互作用を時間的プロセスで可視化し、かつそこでの自己システムと、その自己が埋め込まれた全体としてのシステムを同時に理解し記述する分析手法としては、TEA はまだ確立されていないのである。このような、アクター間の双方向と、個別具体と全体像という抽象度の高低を双方向に捉える、いわば「双方向 TEA」と呼べるものが、研究方法論として必要といわれつつも、TEA はそこに至っていない点が問題であり、本研究はそこにアプローチしたいと考えている。この双方向 TEA と呼べるものを確立することで、同じ時空間を共有した立場の異なる各アクターの視点を重ね合わせ、1 つの事象を複眼的に理解できるようになれば、その領域の支援者に新たな支援策に向けたヒントがもたらされるかもしれない。またそのような全体をシステム的に捉えた事例が積み重なれば、そこから全体としてのシステム的なパターンのようなものが見える可能性がある。ここに学術的な意義があるといえよう。

2. 双方向 TEA 開発に向けて

不登校経験家族を事例とする理由

双方向 TEA 開発の必要性が複数の領域から上げられているが、中でも本研究では、不登校研究を事例とする。その理由の 1 つは不登校問題が、特に社会問題として拡大しつつかつ長期化また複雑化し、国策として喫緊の課題となりつつあるからである。更に、不登校経験家族を記述するにあたり必要な分析概念を TEA が用意している点で研究手法としての相性の良さも理由の 1 つに上げたい。不登校経験家族を事例にすることで、学術貢献だけでなく、広く支援者を通して社会的な生活レベルでの貢献が本研究を通して可能になると考えている。

不登校は、「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義され、小学生の約1.0%、中学生の約4.1%にあたり、8年連続で増加傾向にある（文部科学省，2020）。不登校の要因は、小中学校では「家庭にかかる状況」が最も多く、不登校には含まれない保健室登校や別室登校などの不登校傾向の生徒は10.2%にもなる（日本財団，2018）。全中学生の約14%が不登校または不登校傾向の状態というこの深刻な問題は、子どもや保護者だけを個々に支援するのではなく、1つのまとまりとしての家族全体（以下、不登校経験家族）にアプローチする必要性を示しているといえよう（松本，2004，2007；斎藤，2006）。

不登校問題への支援の在り方として、不登校により同世代との交流や進路の選択が減るなどの消極的な側面の改善を進めつつ（森田，2003；村田・三浦・武田・林・朝倉・伊藤・郡司，2000など）、不登校という行為が、児童・思春期の子どもの発達過程において「親離れ-自立」の前の居場所確認という積極的な側面への支援も進んでいる（坂田・竹田，2000；佐藤，2005；菅，2006；吉井，2017など）。

不登校における支援の方略においては、多様性と柔軟性が求められている。例えば、不登校の当事者の家族だからこそできることが検討されつつあるが、専門家からの助言を積極的に取り込もうとしない保護者も少なくない。しかしながら、不登校支援では、子どもの意志よりも保護者の意志で支援が開始されるか否かが決まるともいわれている（張替，2008；田嶋，2001；竹崎，2006）。支援を求めない保護者と向き合う臨床実践はスクールカウンセラーには不可避であり、その働きかけ方が模索されている（中川，2005；中地，2012；坂田・廣井，2007；渡部，2002；山田，2002）。

このように不登校経験家族に向けて、多様な支援が展開しつつあるが、ここに至るまでには、不登校研究の眼差しやそこに向けた語り（ナラティブ）はいくつかの流れがあった（河合，2012；山岸，2018）。例えば瀬戸（2001）によると、当初不登校は、学校に行くことが自明な社会的規範の中で、行かない行為は「怠け」として捉えられた。やがて、不登校は子どもの成長や発達における治療対象として「医療化」視点で語られ始める（齊藤，2011）。しかし、保護者を中心に不登校というレッテルを貼ることに疑問を呈する非「医療化」の立場から議論が起きる（伊藤，1989；工藤，1993；White, & Epston，

2017/1990）。更に、社会学から、不登校は誰にでも起きうるもので、「登校回避感情」の表出であるという見方が示されると、学校現場では、この感情を測定することで予防や改善につなげる一方で、神経症的傾向などの医療対象とは区別するようになり、「現代型」不登校という呼び方が提示された（伊藤，2002；森田，1991；渡辺・小石，2000など）。そしてこの社会的な見方は、不登校問題に「文化の病」（河合，2009）という視点をもたらすに至り、日本では心の専門家たちが心理学的視点から不登校問題を語り始める（例えば、張替，2008；坂田・廣井，2007；坂田・竹田，2000など）。本研究もそこに位置づくといえよう。

上記のような不登校に関する従来の語りを概観し、瀬戸（2001）は、語る主体が、教育関係者や専門家を占め、不登校経験家族は、語りの中の「作中人物」に追いやられていることが問題だと指摘している。この構造では、不登校経験家族は、他者によって語られる閉じた物語の中の客体に収まり、これらの語りを修正し、発展させる開いた物語の語り手にはなりえない（と思い込んでいる）。この「書き手（専門家）-読み手（専門家）-作中人物（当事者）」という、専門家が創り出す論理的思考の中の閉じた物語構造にゆらぎを与えるためには、「書き手（当事者）-読み手（専門家・当事者・一般市民）-作中人物（当事者）」として、書き手を変え、読み手の幅を広げるもう1つの語り（カウンター・ナラティブ）が必要ではないかというのである。新たな書き手として不登校の当事者や保護者を加えることで、当事者にしか見えない物語が風穴を開け、誰もが不登校になりうる現代型不登校に備えて、広く一般市民が読み手となるような、新たな物語が展開するというのである。

新たな書き手として、不登校経験家族に不登校に関するナラティブの新展開を委ねる場合、研究実践においては、当事者が直接発信する場合も考えられるが（例えば、山岸，2018）、研究者が当事者の視点に寄り添いながら議論を組み立て、研究の遡上にのせることが多数となろう。その場合、ブルーナー（Bruner, 1998/1986）がいう現実を理解する2つの方法、「論理科学モード（logico-scientific mode）」と「ナラティブ・モード（narrative mode）」に注意をする必要がある。前者は、ある種の法則を見出そうとするモードであり、後者は、当事者だけが知る多様な解釈が可能な開かれたシステム、つまりシステミックなシステムを代弁するツールだとされる（野口，2005）。

このように当事者のナラティブを現実理解のための開かれたツールとするためには、その語りを分析する専門

家や研究者にそれを可能にする方法論が必要となる。しかも、不登校問題においては、当事者だけでなくその保護者や同胞、また学校関係者などを視野に入れつつ状況が変容する時間的プロセスを全体として捉えることができるシステム的な視点が必要になる。例えば、不登校問題では、子どもは、3つの移動を経験するといわれている。学校という日常生活から離れる身体的な空間の移動と、新たな時間を経験する時間的な移動、そして不登校児ではなかった自分から不登校児と呼ばれる自分、やがて自らを含め家族や周囲からもそう呼ばれなくなる自分という自己観の変容、つまり「変身」の移動である（瀬戸，2001）。また子どもは、回復期においては、前進・停滞・後退をしながら時間経過のなかで行動と思考を変容させ、保護者も、同様に時間経過の中で子どもや家族、学校関係者と関わりながら行動と思考を変容させるといわれている（稲村，1994；菊地，2009；松坂，2010；村田ら，2000など）。

これらの先行研究からは、同一の家族内でも、子どもや母親、父親、きょうだいや祖父母などの同居家族も、それぞれの自己システムを変容させながら、家族全体としてのシステムをその家族なりに変容させていることが予想される。この点はまさに本研究が試作する双方向 TEA が描こうとしているものと一致している。TEA は、時間を1つの軸として、そこでおきる身体的な移動を複線径路で捉える TEM という枠組みをもちつつ、自己観を含めた自己システムを記述する TLMG（Three Layers Model of Genesis：発生の三層モデル）があり、周囲との関係性を環境要因として包摂する SD / SG という概念もある。この TEA の枠組みを応用し、個々の自己システムの変容が、周囲を巻き込んだ双方向な相互作用のプロセスとして複眼的に描くことができれば、不登校経験家族がおそらく経験する3つの移動（身体的移動・時間的移動・自己観の移動）という多様性の記述も可能になるはずである。ここに、本研究が単方向 TEA を発展させて双方向 TEA を試作するにあたり、不登校経験家族を事例として扱う理由の1つがある。

もう1つの理由は、ある1つの不登校経験家族が、不登校をうまく乗り越えた事例やうまくいかなかった事例、また様子を見ている現在進行形のプロセスの事例など、それぞれの経験の在り様を個別具体的な家族システムの変容として捉えることができれば、事例の積み重ねにより新たな法則が見出せるかもしれないという点である。そしてその事例研究は、不登校支援者に、より俯瞰した解決策のヒントをもたらすだけでなく、今不登校（傾向）に悩む当事者家族や、その予備軍である広く同

世代の子をもつ家族に、希望や予防を視野に入れた具体的な未来展望を付与するとも考えられる。双方向 TEA の開発により、個と全体という抽象度を上下させる双方向な視点と、立場の異なる個々間の相互作用という双方向な視点を支援者が得ることで、支援の在り方に幅が出て、これまでにない支援策が見出せるかもしれないのである。以上のように、不登校研究が TEA の枠組と相性が高い点と、喫緊の社会問題であり時宜を得ているという点が、双方向 TEA の開発にあたり、不登校研究を事例として取り上げる理由である。

3. 目的

これまで述べた問題意識から、本研究の目的を、単方向 TEA を基礎としながら、共通したある事象を立場の異なる複眼的視点からその相互作用を時間経過で捉える「双方向 TEA」と呼べる記述方法を開発することとする。その際の事例として、不登校経験家族を扱う。

分析の手がかりとしては、ナラティブ・セラピーの開拓者であるホワイトとエプストンによる「人も人間関係も問題ではない。むしろ、問題が問題となる。つまり、問題に対する人の関係性が問題となる。」（White & Epston, 2017/1990, p. 55）という概念に着目したい。その理由は、不登校に対する家族の関係性の在り様は、家族がお互いを責めたり、対立したりするのではなく、問題（ここでは不登校）に対して協働できる関係性を築き、問題が問題でなくなることが重要で、そうなるような支援が有用だという視点を示しているからである。これは、家族を1つのシステムとして捉え、家族全体で問題を捉えようとする双方向 TEA と方向性が一致する。また今回の事例としては、インタビュー時点で、家族のメンバーがそれぞれ「不登校が特に問題でなくなった」と述べている家族を調査対象とする。これにより、不登校という問題が家族の中に入り込み、どのようなプロセスで「特に問題でなくなった」という状況に変容したのか、時間経過や家族の相互作用を含めて、それらを1つの成功事例として分析を進めることができると考える。

更にホワイトら（White & Epston, 2017/1990）は、家族間の相互作用を含めた変容過程は、「ドミナント・ストーリー」、「オルタナティブ・ストーリー」、そして「ユニークな知」というナラティブ・セラピーの心理臨床実践で使用される概念で説明できると述べている。これらの概念は、意味づけを経験のストーリー的な構造化と捉えるテキスト・アナロジーと、その意味づけは社会文化

的な文脈の影響を受けるというフーコー (M. Foucault) の権力／知の分析に示唆を得たという。本研究で扱う不登校という出来事は、学校制度という社会的文脈に埋め込まれており、かつ家族というユニークな文化の中に位置づけられるので、これらの概念は分析のヒントになると考える。ここでいう「ドミナント・ストーリー」とは、「彼らが自らの経験をストーリーだてている物語、そして／あるいは他者によってストーリーだてられている彼らの物語」(White & Epston, 2017/1990, p. 38) で、そのドミナント・ストーリーでは説明できない経験について、いきいきと説明できる新しいストーリーを「オルタナティブ・ストーリー」と呼んでいる。更に、オルタナティブ・ストーリーという新しい事象への理解から得られる知識を「ユニークな知」といい、それを意識化することで、彼らが埋め込まれた文脈から距離をおくことができると考えている。

家族システムを考察する手がかりとしては、家族システム論 (中釜, 2016) を援用する。家族システムは生物体システム (Miller, 1978) なので、周囲と情報をやり取りしつつ、そのシステムを変容させる開放システムであり、その実態を捉えるには家族の文脈を考慮する必要があるという。その際に、システムには階層性があるので、家族システムとしては、個人システムと家族のサブシステム (親子, 夫婦, きょうだい, また世帯間など) に分けて捉える視点が必要となる。それぞれが、2者間, 3者間とで相互作用を起こすので、原因と結果は複雑に入り組む円環的因果律 (循環的因果律) となり、単純な直線的因果律とはなりえない。そしてシステムの変容は、最初にシステムを安定させようとするネガティブフィードバック (N-FB: Negative Feedback) による形態維持, 次いで、ある一定レベルを超えると逆に変化を助長しようとするポジティブフィードバック (P-FB: Positive-FB) による形態発生, そして新たな高次システムへと発達 (D: Development) が起きるので、家族シス

テムにおいてもそれに準じる変容があると考えている。このような家族システム論は、自己システムを説明する TLMG を応用して家族をシステムの的に捉えるにあたり、分析や考察の手がかりになると思われる。

研究方法

1. 調査協力者と調査実施者

中学生の時に不登校状態になった経験をもつ S さん (20代, 男性, 以下「S」と敬称略) と、その母親 M さん (40代, 以下同「M」), 父親 F さん (50代, 以下同「F」) の協力を得て、インタビュー調査を実施した。この家族は西日本に在住する3人家族である。不登校は公立中学校2年生の9月から3年生の夏休みまで約1年間であった。Mの職業はパート社員であり、積極的に家事と子育てを行う責任感の強い母親であった。Fは、一般企業勤務で、家庭を経済的に支えることが務めと考える父親であった。3者はそれぞれ不登校と向き合い、現段階では、不登校は特に問題ではなくなったと思える状態にある。調査協力者の概要は表2の通りである。調査協力者とは、第2著者が、某「不登校の親の会」の紹介で協力を得るに至った。

2. インタビューガイドとデータ収集

インタビューガイドは、「不登校になった際の気持ちや考えについて教えてください」、「不登校になった際の家族や家族関係について教えてください」、そして「不登校が特に問題でなくなった経緯について教えてください」

表2 調査協力者の概要

調査協力者	職業等これまでの経緯	1回目 2019年12月27日	2回目 2020年1月21日	3回目 2020年2月11日	合計 平均インタビュー時間
Sさん: 不登校当事者 (20代・男性)	公立中学校の時に、不登校を経験	45分	22分	19分	86分 29分/回
Mさん (Sさんの母親・40代)	企業勤務3年 パート勤務	48分	22分	12分	82分 27分/回
Fさん (Sさんの父親・50代)	会社員・事務職	40分	18分	11分	69分 23分/回

・3人家族 ・インタビューアー: 第2著者 ・場所: 市民センターのセミナールーム

い」とし、半構造化インタビューを実施した。データの収集は、調査協力者 3 者に対し、各 3 回実施した（2019 年 12 月～2020 年 2 月）。インタビュー時間は、S が計 86 分（1 回目 45 分，2 回目 22 分，3 回目 19 分），M が計 82 分（同 48 分，22 分，12 分），F が計 69 分（同 40 分，18 分，11 分）であった。インタビュー内容は調査協力者の合意を得て IC レコーダーに録音し、逐語録を作成した後、速やかに対応表を作り、録音データおよび逐語録は厳重に廃棄した。インタビューは、不登校が始まってからの時間経過に沿いながら、調査協力者の語りの流れに合わせて進めた。2 回目と 3 回目は、1 回目と 2 回目の語りを基に作成した TEM / TLMG 図（豊田，2015）を参照しつつ、加筆や修正をしてもらい、最終的に研究者と調査協力者が共に一定の同意に達するトランスビューの状態に至ったことを確認した。インタビューは全て第 2 著者が実施した。

なお、3 者のそれぞれの TEM / TLMG 図から、最終的に家族システムを可視化しようとする双方向 TEA を行うに際し、研究者の視点で結果図を示すので、調査協力者とのトランスビューは不要と考えている。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、第 2 著者が所属する大学の倫理審査会で承諾を得た。また、調査協力者 3 者全員に、本研究の目的や実施内容について、同意書で詳細を説明しインフォームド・コンセントを得た。具体的には、過去の不登校にまつわることを想起してもらうことで、心理的負荷がかかる可能性があるため、つらい経験などについて無理に思い出していただくかなくてもよいこと、研究に必要な個人情報とは話してもらわないこと、インタビュー開始後は、いつでもインタビューを中止できることを伝えた。更に、得られたデータは、個人が特定されかねない内容は扱わず、息子を S (Son)，母親を M (Mother)，父親を F (Father) とアルファベットで表記して匿名性を担保し、本研究に不要な情報はデータとして扱わないことを説明し了解を得た。

4. 分析方法

基本型となる単方向 TEA を発展させ、3 者が相互に影響し合う過程を可視化するツールとして双方向 TEA を開発した。その枠組と手続きについて述べる。

(1) TEA3 枠組を融合させた最小分析単位の設定

3 者の自己内変容を同じ枠組みからプロセスで捉えるために、個人の内的変容を三層（第 1 層：個別活動レベル，第 2 層：記号レベル，第 3 層：信念・価値観レベル）に分けて捉え記述しようとする自己モデル TLMG を援用した。具体的には、個人の自己内変容のプロセスと時期区分の関係を示した豊田（2022）の分析枠組み『TEA3 枠組（HSI / TEM / TLMG）を融合させた最小分析単位と時期区分の関係図（TEM / TLMG 図）』（図 1）を援用した。本研究では、この枠組みを共通枠組として使用することで、従来の単方向 TEA を、立場の異なる 3 者 3 視点による双方向 TEA へと発展できると考える。その理由は、この枠組みを用いれば、不登校問題における 3 つの移動（瀬戸，2001）を同時に視野に入れられるからである。時間的移動（横軸）と自己観（TLMG 第 2 層）の移動は同じ枠組み内にあり、空間的移動は図中（TLMG 第 1 層）にテキストで記述できる。更に、同じ枠組を使用することで、トランスビューを経た立場の異なる 3 者 3 視点を重ね合わせる妥当性が担保され、当事者だけが知り得る固有のナラティブを、家族システムとして客観的に扱うことができると考えられる。また同じ枠組を使用することで、研究方法としての信憑性と再現可能性を担保でき、ある意味ナラティブモードから論理科学モードへと転換できると考えている。なお、この関係図が示す時期区分は、TEA の基本単位（安田，2015）を基に、アイデンティティの変容を捉える枠組みとしても援用されている（豊田，2015；豊田・相良，2016）。

(2) 双方向 TEA の開発と分析方法

単方向 TEA を発展させ双方向 TEA を開発するにあたり、以下の 3 つの手順で分析を進めた。

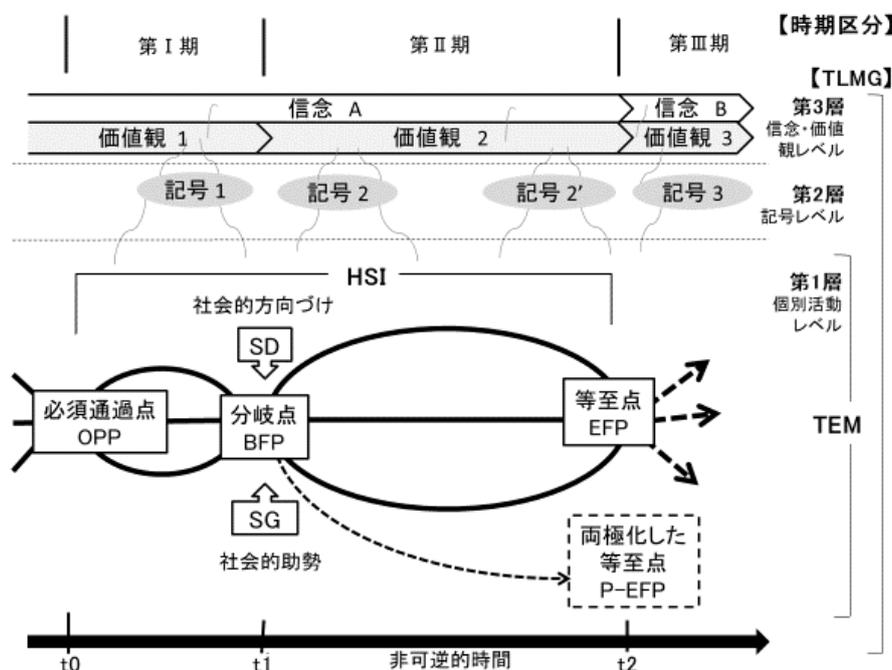
A. 3 者それぞれの単方向 TEM / TLMG 図の作成

最初に不登校に対し立場の異なる S と M と F の語りから、図 1 の「TEA3 枠組を融合させた最小分析単位と時期区分の関係図（TEM / TLMG 図）」（豊田，2022）を分析の枠組とし、それぞれの TEM / TLMG 図を作成した。これらは当事者 3 名から、それぞれトランスビューを得た図である。

B. 2 者間の双方向 TEA による分析

S と M という立場の異なる 2 者間の受信と発信とい

図1 TEA3 枠組 (HSI / TEM / TLMG) を融合させた最小分析単位と時期区分の関係図 (TEM / TLMG 図) (豊田, 2022)



う双方向な相互作用を記述する双方向 TEA 図を作成するにあたり、以下の5つの手法を用いた。

手法1として、TEAが分析の基本軸とする非可逆的な時間を横軸として、図中最下部に黒右向き矢印を描き、SとMの時間的移動をそれぞれ合わせながら、上段(S)と下段(M)にTEM/TLMG図を描いた。その際の手がかりとして、例えば「病院に行く」といった具体的な日時が分かる出来事に着目し、それらを同一時間軸上に記述した。また縦軸には、家族成員それぞれの自己システムがもたらす不登校をめぐる感情価を設定した。その理由は、不登校が登校回避感情の表出であるという見方がある(例えば、伊藤, 2002)、実際にそれに関連する語りが3者にあったからである。それぞれTEM図としてTLMGの第1層に個別に位置づけ、「嬉しい、楽しい、楽、満足」といったポジティブ感情を〈+〉、反対に「悲しい、空しい、辛い、苦しい」といったネガティブ感情を〈-〉とした。

手法2として、第1層で捉える不登校に関する3者の個別活動レベルの語りを、短期的・長期的行動に分けて表示した。可視化するにあたり、できる限り簡素化し見やすさを優先させるために、長期的な行動変容は横長の右五方形矢印で図の背景を変えて示し、その具体的な行動を図の左隅に記述した。また短期的行動はTEM図としてその右五方形矢印の中に描いた。

手法3は、2者が互いに影響し合う、また一見影響し合わないようであるが、時間を経て影響が出る場合などの言語・非言語メッセージの表示方法である。まず、それぞれの語りから互いに影響し合うと理解できる事象は、発信者が発する言語・非言語メッセージを、受信者がどのように理解したかでSD/SGを決め、双方向SD/SGとして曲線矢印で表記した。これは従来までの単方向TEAにない新しい概念なので、可視化手法として、白曲線矢印を双方向SG、黒曲線矢印を双方向SDとして新たに表示することにした。例えば、図2a内①は、MがSを病院に連れて行くという事象である。Sにとっては「病院に連れて行かれる」というMからのSDであるが、一方でMの心配を汲み取りそれを受け入れるという意味でMからのSGでもあった。従って、Sにとっては、SDでもSGでもあるので、白と黒の両方の曲線矢印をここでは示した。しかし、Mにとっては、無言を決め込むSの態度はSからの拒絶というSDでしかないので、黒曲線矢印で双方向SDとして示した。

手法4は、発信者の意図とは異なる理解を受信者がする語りの記述方法である。例えば、図2a内④に示すように、良かれと思い質問を投げかけ続けるMの態度〈登校しない理由を聞く〉(第1層を括る大きな右五方向矢印)では、「M: いい加減にしなさい、ちゃんと考えてるの? なぜ学校に行かないの?」という発話が、受信者S

には母の心配な思いと感じつつも (SG), 登校圧力 (SD) となる。そこでこれを, 白曲線矢印の双方向 SG と黒曲線矢印の双方向 SD として示した。そして M が深く案じる思いは届かないので, S には届かない長さで短い白曲線矢印で双方向 SG として表示した。つまり, 短い曲線矢印で示される双方向 SD / SG は, 発信者がどのように発したかを示して、受信者には届いていないことを示している。

手法 5 は, 発信者の語りにはない事象 (言語・非言語) が, 受信者の語りから聞かれ, それが受信者にとって SD / SG となる場合の表記である。その場合, 語りとしては発信されなかったその行為者の第 1 層に不等点線四角を描き, その中に事象を記述し, SD / SG として受け取った成員の名を () 内に示した。例えば図 2a 内⑩の M <S に危機感をもたせるために罵倒する。空しい気持ちになる> では, そのことに関する S の語りはなかったが, M は <S のふてくされた顔> という非言語メッセージを受け取り, 思いが届かない空しい気持ちを語っている。M の罵倒は, S にとっては SD (黒曲線矢印) であり, S のふてくされた顔は M にとって SD (黒曲線矢印) となる。そして M が良かれと思い危機感をあおる S への SG は, S には届かない (短い白曲線矢印)。

以上の 5 つの手法を用いて, S と M の二者の相互のやり取りを図中に可視化した。

C. 3 者間の双方向 TEA による分析

最後に, ここまで記述した S と M の 2 者間の双方向 TEA 図に, F の TEM / TLMG 図を重ね合わせ, 3 者間の受信と発信の相互作用を記述する双方向 TEA へと分析を進めた。その際に, 先の 5 手法に新たに 2 つの手法を加えた。従って本研究では, 全 7 手法を用いて双方向 TEA 分析を行った。

手法 6 は, 双方向 SD / SG が 3 者間で相互作用を起こしている在り様を示す手法である。2 次元の図中表記という限界から, 本研究は, 不登校の当事者である S に影響がある場合だけの表記方法となった。具体的には, M と F のやり取りが S に影響を与える場面での表記で, F と M のやり取りを双方向 SD / SG として S を囲むように曲線矢印で表記し, その事象での S の語りを図中に示した。例えば, 図 2a ⑩では, M <自暴自棄 最低限の家事しかしない> と F <最低限の家事しかしない M に我慢する> が S <家の居心地が悪くなる> を囲っている。ここでは家庭環境が悪くなる事象を F と M は直接的に感じるが, S は二者の様子から間接的に感じ取っている。3 者が同じタイミングでそれぞれの言葉で語って

いる事例である。

手法 7 は, 研究結果として時期区分を導出する際の手法である。ここでは図 1 に立ち返り, イメージなどの記号レベル (第 2 層) と信念・価値観レベル (第 3 層) は相互に影響し合い, 個別活動レベル (第 1 層) にも相互に影響し合う在り様を 3 者で捉え直した。3 者 3 層の変容から, 例えば 2 者において第 2 層で捉える自己イメージなどに変容があっても, 残り 1 者は何も変わっていない場合があるなど, 3 者の個々の時期区分と, 家族システムという 3 者の変容のタイミングから, その変容が何を意味するのかを考えながら, 時期区分を導出するよう心がけた。そのために, 特に分析の共通した概念となる不登校に対する記号・イメージと自己イメージの変容を第 2 層で, 子育てや学校といった本研究の中心概念に関する信念や価値観の変容を第 3 層で捉え, それぞれ同一時間軸に示した。例えば, M は第 3 期 <S に登校の話をしていない / 会話がなし> と第 4 期 <S に登校の話をしていない / 会話がある> で, 大きく個別活動レベルを変容させ, その背後で, 価値変容点 (VTM: Value Transformation Moment) と呼べるような, 学校と子育てに関する記号と価値観を大きく変容させている。しかし, その間の S の行動変容は特に見られず, 価値観の変容は第 5 期まで待つことになり, F の子育てに対する価値観の変容も第 5 期となる。主に語りから捉える個別活動レベルの行動変容 (第 1 層) に着目しながら, その背後にみられる記号レベル (第 2 層) と信念・価値観レベル (第 3 層) の変容を読み取ることで, 3 者からなる家族をシステムとして捉える時期区分が可視化でき導出できるのではないかと考え, 記述を試みた。

以上 7 手法を用いて単方向 TEA を応用し, 3 者の双方向 TEA として分析を進めた結果が図 2a と図 2b である。

結果と考察

図 2a と図 2b が示すように, 分析の結果, EFP 「不登校が特に問題でなくなる」と P-EFP (Polarized Equifinality Point: 両極化した等至点) 「不登校は続いている」を, 当事者の視点に寄り添い捉え直すと, 3 者それぞれが自己システムを変容させつつ, 家族全体としては, 2nd EFP 「S の人生は S が決める」, 2nd P-EFP 「S の人生を S 以外の人が決める」であると結論づけた。そして, そこに至るまでには, 主に双方向 SD / SG で説明できる 25 の場面があり, 大きく 6 つの時期区分 (第 1

図 2a 3者 (S / M / F) の双方向 TEA 図 (第1-2-3期)

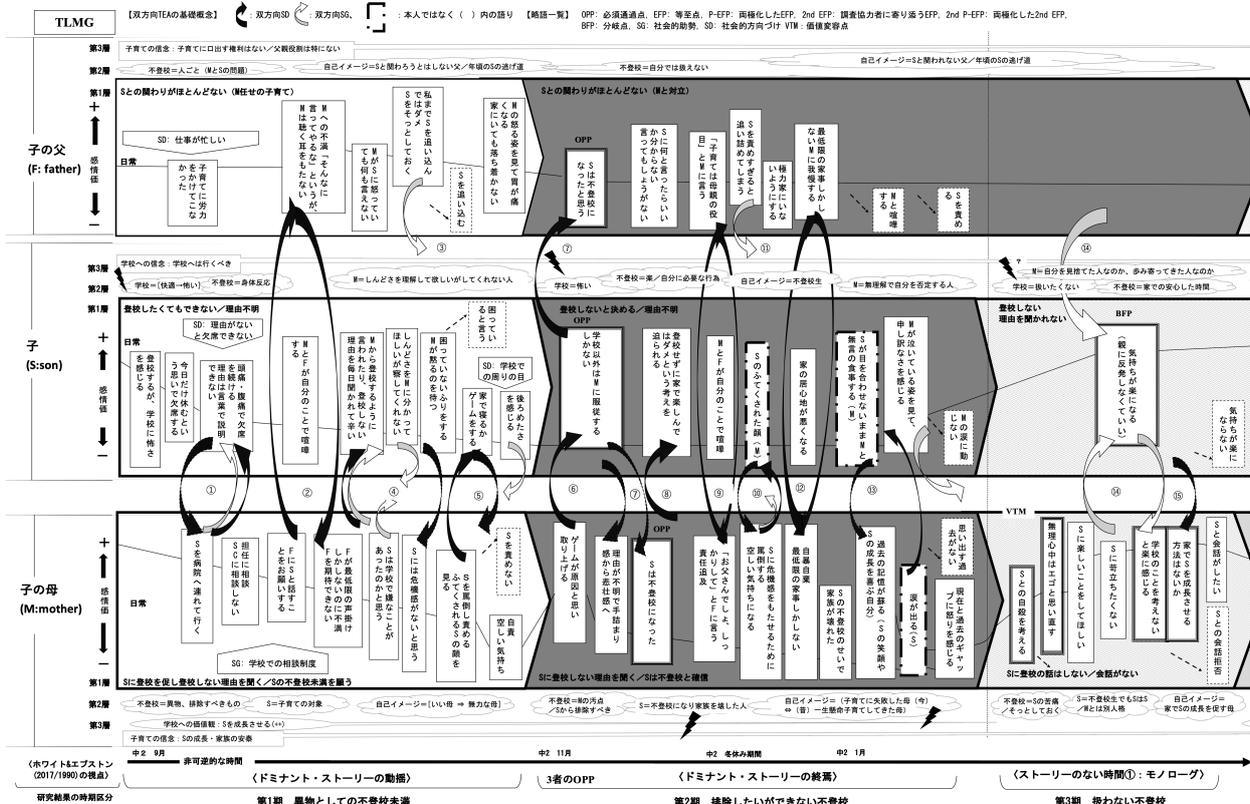
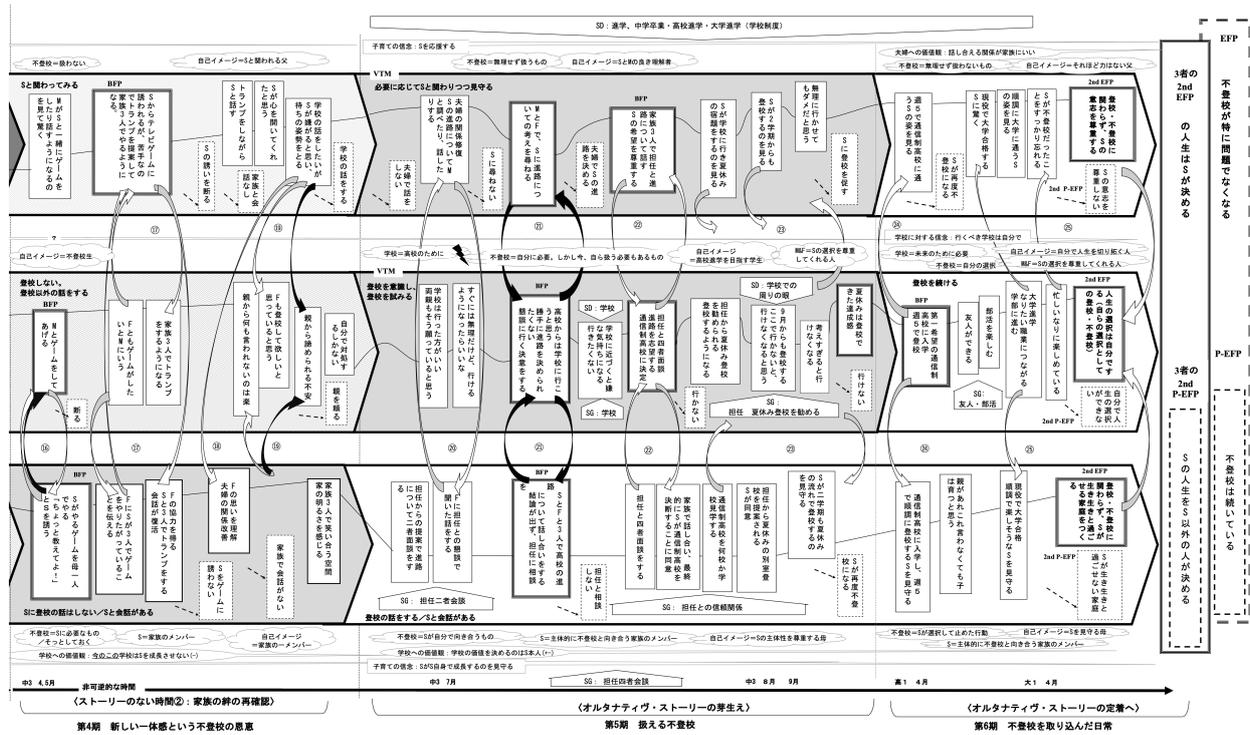


図 2b 3者 (S / M / F) の双方向 TEA 図 (第4-5-6期)



期：異物としての不登校未滿，第 2 期：排除したいができない不登校，第 3 期：扱わない不登校，第 4 期：新しい一体感という不登校の恩恵，第 5 期：扱える不登校，第 6 期：不登校を取り込んだ日常）を経験したものと結論づけた。

1. 時期区分

分析結果として抽出された各時期の特徴について以下に説明し，分析の手がかりとするナラティブ・セラピーの概念を用いて考察を加える。

(1) 第 1 期：異物としての不登校未滿

S と M と F はそれぞれの日常を送っていたが，S が中学 2 年 2 学期の始業式の時から，クラスの居心地の悪さを感じ始める。

「S：クラスで大人びてきたり，周りでいじめのようなことがあったりして。自分には何もされていないが，クラスの居心地が悪くなって，油断できない感じがした。始業式には何とか行ったが，疲れてしまった。なんか，行きたくないと思って休み始めて・・・。」

この登校不安により，まず S と M の 2 者の日常が動揺し始める。①（図 2a/b 内，以下省略）S が体調不良（頭痛・腹痛）を訴え欠席を続け，M は S を病院に連れて行くが理由が分からず，ずる休みではないかと登校を促す。S は，M が心配している気持ちを受け止めつつも，恐怖感で身体が拒否するように登校ができない。これが非言語メッセージとなり，S と M の負のやり取りが続く。② M は，F に父親として，S が学校へ行けるよう対応を求めるが満足いくものではなかった。一方 F は，S に対してただ怒るだけの M の対応に疑問をもち口論となる。S はその喧嘩の原因が自分にあるが故に，その狭間で苦しむ。③仕事を理由に子育てを M 任せにしていた負い目は，F の役割分担意識を強め，〈自分まで S を追い込んだらダメ〉だと思い，S をそっとしておく。しかし，その思いは，S には届かない。④ M から登校圧力をかけられる S は，自分自身を思っただけのこととは理解するが，負担になる。しんどさを分かって欲しい唯一の理解者は M であるという S の思いは，M には届かない。M は，S が学校で嫌な思いをしたのかと心を寄せるが，その思いは S には届かない。S はただ困っていない態度し

かとれず，M は S が危機感をもっていないと受信し，S を罵倒して責め続ける。⑤毎日続く M からの登校圧力を前に，S は自室で寝るかゲームをするしかない生活になる。その様子は非言語メッセージとなり，M は子育てに失敗したと感じ，空しい気持ちになる。

この家族のドミナント・ストーリー（以下，DS: dominant story）は，F は家のことを M に任せて仕事に集中すること，M は家事に一生懸命に取り組み，S の子育てを主導すること，それで S は問題なくこれからも成長していくと思っていたこと，そして S は M の言う事を聞くということだった。しかし，S が M の言う事を聞かず不登校を始めることで，この DS に揺るぎが生じる。この時期は，ある意味で対岸の火事であった不登校が家庭の中に入り込み，このまま S（自分）は不登校になるのではないかという不安にそれぞれが襲われているので，この時期を〈異物としての不登校未滿〉と呼ぶことにする。

(2) 第 2 期：排除したいができない不登校

⑥ M は，不登校が継続している要因の 1 つは，家を居心地良くしているゲームだと思い S のゲームを取り上げる。⑦ S は，〈学校以外は母に服従するしかない〉と好きなゲームを取り上げられることに応じるしかなかった。ゲームを取り上げて学校に行かないことで，M も F も S が不登校になったと確信する。⑧ M からの登校圧力に対して，S は，登校せずに家でゆっくり楽しんでいることを否定されていると感じた。⑨ M は，F が何も対応しないことを父親失格と責め，F は家のことは母親の役目だとして，互いの落ち度について喧嘩をする。⑩ M は，S のふてくされた態度（M の語りから）を見て，S に危機感がないと思い，あおるように罵倒した。⑪それを見る F は，自分だけは S を責めないようにするが，その思いは S には届いていない。⑫さらに②～⑤と同じような構図が繰り返され，自暴自棄になった M は最低限の家事しかなくなり，S は家の居心地が一層悪くなったと感じる。⑬そうした中でも，S と M は，向き合ったままお互いに食事をとるが，目を合わせず無言でいる。その姿（M の語りより）から，それと対照的に S が小さかった時の笑顔やそれを見る自分の幸せな時間が記憶として M に蘇る。そこで流れる M の涙（S の語りより）は S を追い込み，M に申し訳ないという思いを起こさせる。しかしその思いは M には届かない。

この時期は，家族の DS の動揺はもはや修復のできないものとなり終焉を迎える。S が M の言う事をきかず不登校を続け，M は母親役割と自負していた家事を最低

限にし、Fは二人と関わろうとしない。3者は皆、家族の中に不登校が入り込んだと認めるしかない状況になったので、この時期を〈排除したいができない不登校〉と呼ぶことにする。

(3) 第3期：扱わない不登校

家族が壊れたという絶望感にかられるMは、Sと二人で心中を考えるほど思い詰める。しかし、無理心中という行為のイメージは、不登校であろうとなかろうと、Sが〈Mとは別人格〉だというイメージをMにもたらす。これが価値変容を促すように、Sの死のイメージは、過去の笑顔のSのイメージと強く対比して想起された。⑭Sの笑顔を奪う登校圧力を止め、Sが楽しいと思え、M自身もSに対して苛立たないために、一旦学校のことを扱わないと決める。そのMの変容は非言語メッセージとしてSに伝わり、Sは徐々に気持ちが楽になり、Mに反発する必要もなくなる。Fは、年頃の息子の逃げ道になることが父親役割と思い、Sと直接的なやり取りはしない。⑮Mは、少し楽そうになったSをみて安堵するが、一方で、登校しなくともSが成長する方法が必要だと考え始め、まずはSと会話することを望むようになる。

従来のDSは終焉し、かといってそれに代わる新たなストーリーもまだない。DSがない時間では、システムの最小単位となる自己システム内の語りだけが強調される。この時期は、3者がSの不登校を確信しつつも、あえてそれを問題視しない態度で過ごすので、〈扱わない不登校〉と呼ぶことにする。

(4) 第4期：新しい一体感という不登校の恩恵

⑯Mが不登校を扱わないことで、SにもFにも心に余裕が生まれはじめる。MはSと会話するきっかけを模索し、Sから取り上げたゲームを自分がやることで、Sの気を引こうとする。「ちょっと教えてよ!」とMが言うと、一瞬Sは自分への当てつけかと受け取り啞然とするが、Mが自分に歩み寄ってきたのかもしれないと思い、誘いに乗る形で一緒にゲームをしてあげる。この行為が分岐点となり二人の会話が始まる。⑰やがてSの方から「Fとも一緒にゲームがしたい」とMに話を持ち掛ける。Fは苦手な(テレビ)ゲームではなく、トランプを提案し、家族3人でトランプをしつつ会話をするようになる。ここがFの大きな分岐点となる。Mとの会話は復活し、さらにSと関わりも生まれ、Sが心を開

いてくれたと嬉しくなる。⑱Mは、登校のことを口にしないFのSに対する思いを理解し、夫婦の緊張関係が解けたと感じる。⑲Sは、MだけでなくFからも不登校のことを言われないので、親から諦められたかもしれないと不安になるが、反対に学校のことは自分自身でなんとかするしかないと思うようになる。Sは複雑に両親からの思いを受け取りつつ、一人で考える時間的余裕を得る。

この時期は、DSに代わる家族のオルタナティブ・ストーリー(以下、AS: alternative story)はまだ生まれない。しかし、その最小単位である3者の関係性やつながりを感じるような、たわいのない会話生まれ、3者とも不登校であっても家族なのだという一体感を実感する。この新しい一体感は、Sが不登校と向き合う揺るがない基盤となったのか、Sの主体性を育むきっかけとなる。そこで、この予期せぬ望ましい結果が生まれたこの時期を〈新しい一体感という不登校の恩恵〉と呼ぶことにする。

(5) 第5期：扱える不登校

⑳これまで不登校の話を一貫横に置いていた3者だが、担任からMに二者面談の提案があり、実施される。Mはそこの内容をFに伝え、夫婦でSの進路について話し合う。これまで子育てはM任せだったFが、Sの進路について調べ始め、MとSの良き理解者という役割意識を得る。Fにとっては、不登校は無理に扱うものとしてではなく、Sと一緒に進路を考える大切な時間として意味づけられた。MとFの様子をみて、Sは〈学校は行った方がいいと思う。両親もそう願っていると思う〉と両親の思いを察する。㉑MとFは、Sと話し合いをもつが話はまとまらず、担任を入れて四者面談を行うことになる。Sは学校に近づくと嫌な気持ちになるが、勝手に進路を決められたくない思いから、何とか学校に行き四者面談に臨む。㉒結局Sが選択した通信制高校を、MとFが尊重する形で、Sの進路が決まった。Mは、不登校はSが自分で乗り越えるものとして意味づけ、自ら手放す。㉓その後、担任から夏休み中の別室登校を提案され、Sは登校した。Sは2学期が始まると周囲の目が気になるが、〈ここで行かないと行けなくなる〉と葛藤する。Sは、不登校は自分が向き合うことでしか解決しない問題だと受け止めた。

この第5期は、家族が全員で不登校と向き合い、新たな段階へと進むASが生まれ始めた。具体的には、MとFと一緒にSを支え尊重して、高校進学について話し

合った。それぞれが不登校を自分の問題として扱えるようになったので、この時期を〈扱える不登校〉と呼ぶことにする。

(6) 第6期：不登校を取り込んだ日常

④通信制高校に進学したSは、週5で順調に登校し、MとFはその姿に安心した。Sは友人ができ、部活に入り、学校生活を満喫できた。⑤その後、Sは、自分のなりたい職業を見据えた大学に合格・進学し、MとFは安堵する。Sはこれまでの経験から、〈人生の選択は自分です〉(Sの2nd EFP)という主体性のある生き方をもつようになった。Mは、〈登校・不登校に関わらず、Sが生き生きと過ごせる家庭をつくる〉(Mの2nd EFP)という気持ちで、成長したSの居場所を支える役割を認識する。さらに、Fは、〈登校・不登校に関わらず、Sの意志を尊重する〉(Fの2nd EFP)という思いに至るが、特に何をするというのではなく、ただそこにい続けて何かあれば話を聞きくという役割と、夫婦で会話をするこの重要性を再確認した。

この第6期では、不登校から新たな段階へと進むASが展開し始める。S(自身)が再度不登校になるかもしれないという不安を否定するのではなく、順調に登校するS(自分)に安心しつつ様子を見守る日々が続く。単純に不登校が終わったというよりも、不登校にならないよう

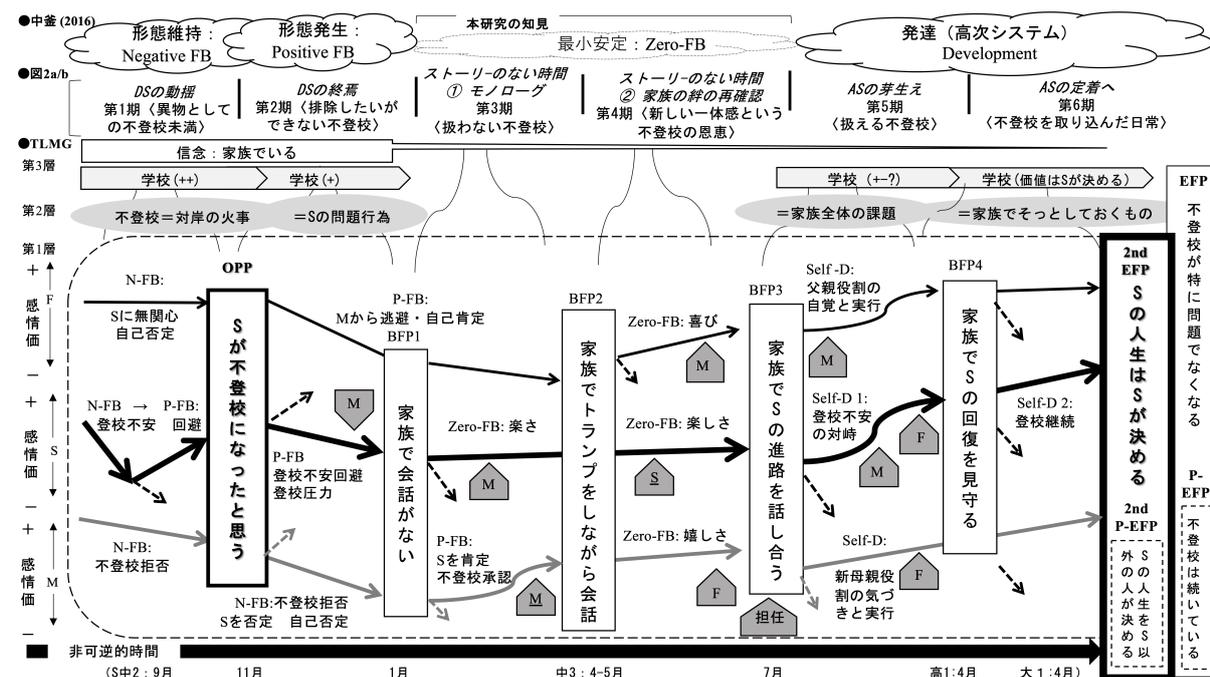
に、それぞれができることをしつつ、再度不登校になったとしても、それを受け止める自信があるような日々に見える。3者が各立場でそのような自信を持っている様子がうかがえたので、共通して3者の2nd EFPを〈Sの人生はSが決める〉、2nd P-EFPを〈Sの人生をS以外の人が決める〉と結論づけた。

この3者にとって不登校という問題が問題でなくなるという意味は、不登校はすぐそばにあることを心に留め、その上で不登校にとらわれ過ぎず前向きに新たな生活をするという姿勢で居続けることである。不登校を家族全員で扱えたという自信がその背後にはあるのだろう。そこでこの時期を、〈不登校を取り込んだ日常〉と呼ぶ。このように、以前は不登校に揺れ動かされていた家族が、登校よりも優先するものの存在に気づき、3者それぞれが自身の新たな役割に気づき、Sの主体性を伸ばすことで不登校を乗り越える術を見出しているようである。これがこの家族の「ユニークな知」といえそうである。

2. 双方向 TEA から捉える家族システムの変容プロセス (双方向 TEM / TLMG 図)

上記の双方向 TEA 図 (図 2a と図 2b) が示す家族の個々の自己システムの変容とその相互作用の在り様から、この不登校経験家族を1つの家族システムとして

図3 双方向 TEA が示す家族システムの変容プロセス (双方向 TEM / TLMG 図)



家族システム論（中釜，2016）から捉え直し，その変容プロセスを可視化したものが図3の双方向 TEM / TLMG 図である。S と M と F からなる不登校経験家族を1つの家族システムとしてみると，OPP（Obligatory Passage Point：必須通過点）は〈S が不登校になったと思う〉となり，4つのBFP（Bifurcation Point：分岐点）を共通経験としながら，それぞれが自己システムを変容させ，3者の2nd EFP〈Sの人生はSが決める〉（2nd P-EFP〈Sの人生はS以外の人が決める〉）に至ったと理解した。ここで注目すべき変容は，第2層で捉える不登校イメージ（記号）とそれに関連した家族に対する信念が示す家族システムの変容である。具体的には，〈形態維持〉〈形態発生〉に次いで〈ゼロ・フィードバック〉と呼べる最小安定の時期があり，その後高次システムへと〈発達〉していた点である。

(1) 不登校イメージ（記号）の変容

不登校イメージは第1期から第6期の順に「対岸の火車→Sの問題行動→（扱わない）→（扱わない）→家族全体の課題→家族でそっとしておくもの」と，3者で一定のイメージを共有できていたように見える。そこに至るまでの3者の自己システムの変容経路は，図2a・図2bが示すように，全く異なるが，上記のように要所では不登校イメージを共有できているのがこの家族の特徴といえる。

具体的には，不登校イメージの変容は，第3層で捉える学校に対する価値観に影響を与え，3者で共有しつつ大きく変容させている。不登校傾向の第1期では，学校は自明のこととして価値あるもの〈++〉であったが，不登校が決定的になると，その学校はS（自分）が行けない学校という意味で，価値が下がる〈+〉。そして一旦学校の価値観が下がるのではなく価値観そのものが語られなくなる。その後3者は，自己システムを変容させながら〈価値はSが決める〉として共有する。

ここでは学校そのものの価値観が絶対的なものから相対的なものになったと理解できる。この家族の事例からは，不登校経験家族にとっては，生徒（子）が登校できる学校に価値があるのであって，そのように対応できない学校には価値が見出だせなくなることを示唆している。不登校に誰でもなり得る社会においては，生徒優先（学生ファースト）が学校には求められるということであろう。その意味では，この事例での担任が介入する（しない）タイミングは結果を良い方向に導いたといえるのかもしれない。第5期には，担任は，家族を1つにまとめ

るSGの機能を果たしている。家族の成員以外の人も，家族システムを変容させようという点で，環境との開放性が示された結果であり，支援を求めない保護者に向けた介入の意義やタイミングの重要性を示唆する事例であろう。

(2) 家族に対する信念〈家族でいる〉とは

この事例家族で注目したいのは，第3期でMが不登校を扱わないと決め，不登校という記号から導かれる行動を意識的に止めたことである。これが非言語メッセージとしてSGとなり，SとFも不登校に対する記号を発しなくなる。頭の中で大きな位置を占めていた不登校記号が，一旦おさまったことで，3者はそれぞれ，ポジティブフィードバック（P-FB）でもネガティブフィードバック（N-FB）でもない，ゼロフィードバック（Zero-FD）と呼べるような〈最小安定〉の状態に自己システムが落ち着いたといえる。つまりある意味，自己システムが簡潔化する時間を得て，それぞれが信念に沿う行動へと変容したと理解できる。しかしそれは逆に，もしMが不登校記号を発し続ければ，〈最小安定〉へとSとFの自己システムが向かうことなく，この事例家族は別の経路を経験していたかもしれないのである。

では彼らもつ家族に対する信念とはどのようなものだったのだろうか。本事例では，3者のそれぞれの家族に対する信念は，一貫して，また共通して〈家族でいる〉であったと思われる。3者はこの不登校を経験するまでは，幸せを感じつつ学校生活と共に家族で過ごす日常を送り，それは自明のものと思っていた。だからこそ，それぞれが不登校を異物として捉えたのである。しかし，家族でいることが日常であることは，Sが不登校になってもこの家族では変わらなかった。3者の語りからは，不登校を経験しても，家族で過ごさない日常や家族でいることを諦めるという記号は読み取れない。つまり，ばらばらになることは望まず，むしろ家族に気を遣いつつも，相互に家族の成員から承認されたいという欲求が読み取れる。

唯一，Mが〈家族が壊れた〉と感じ，自死記号を発する瞬間があったが，不登校か否かを越えて〈家族でいる〉という信念が，〈Sは別人格〉という記号をすぐに導いた。一瞬，家族でいることに揺らぎを与えるが，それがきっかけで，〈家族でいる〉ことがMの信念であることに自ら気づくきっかけになったともいえるかもしれない。

Sが〈家族でいる〉という信念をもつ様子は，第2期

の「学校以外は M に従うしかない」という語りから特にうかがえる。学校に行かないという行為は、M の圧力を跳ね返すほどの強さであった。あり得た径路としては、もし M が無理にでも学校に行かせようとするなら、S は家族でいることを止めていたかもしれない。実際には、家族内での居心地が悪くなくても、家族でいることを止めようとする語りはなかった。そして第 3 期に入り、M が不登校を扱わなくなったことで、「気持ちが楽になり」このままでも S は家族でいられると思ったのであろう。逆に、このままの形でなんとか家族でいられると思ったから、気持ちが楽になったのかもしれない。

F が〈家族でいる〉という信念をもつ様子は、第 2 期の「最低限の家事しかしない M に我慢する」から特にうかがえる。F は一貫して M や S との関わり合い方を模索している。家族がバラバラになることを想起させる語りはなく、〈家族でいる〉ことは、信念として強く貫かれていると理解できた。むしろ、今までよりも家族でいることに努力したいし、その役割を担おうとしている。F にとっては、この不登校経験は〈家族でいる〉という信念を再確認するものとなったとも読み取れる。

このように本事例の家族は、それぞれの自己システムがゼロ・フィードバックの最小安定に入った時、〈家族でいる〉という揺るぎない信念を共有していたことにそれぞれ気づき、これを根拠に家族として不登校を扱えるという自信を得たように理解できる。おそらく再度不登校という異物が家族システム内に入り込んでも、〈家族でいる〉という信念が共有されているので、3 者が同じ方向に解決策を見つけ、家族システムを崩壊させない径路を選択するということである。

ではなぜ、3 者は同じような〈家族でいる〉という家族に対する信念を共有できたのだろうか。その理由の 1 つは、円環的因果律が、目の前の第 1 層で捉える対人関係で起きる行動レベルだけでなく、時空間を越えて第 2 層で捉える記号やイメージのレベルで起きていたからだと推測される。不登校に関連した今ここでの言語・非言語コミュニケーションがもたらす負のイメージや記号は、それ自体が参照項になり、それとは真逆の過去の思い出からなる正のイメージや記号を導出していた。その両者が緊張状態になるが、確かにあった楽しかった過去の思い出という記号は、〈家族でいる〉という信念と安定的に強く連動し、それに引き寄せられる行動変容が起きたと理解できる。過去の強い記号が新たな行動を導くという意味で、円環的因果律が時空間を越えている。

この時空間を越えた円環的因果律を自己内対話として SD / SG で捉えると、S の不機嫌な態度を見て生じた今

ここの身体レベルの不快感（第 1 層）に対し、過去の幸せな家族と自己のイメージ（M）が SG となり、不登校という記号を扱わないとする M の行動が導かれたという説明ができる。またそれは、M の日常で積み重ねられてきた、たわいもない家族の会話や S の笑顔といった過去の幸せなイメージ（M）が、M に〈家族でいたい〉という信念をもたらす SG にもなっているといえよう。

更にその信念に基づくこれまでの M の行動や態度は、子育ての過程で S にも家族を大切に思う思いを育ててきたようである。S は、楽しい家族の時間や学校に行けていた充実した思い出を感じている（S）。それが SG となり、S は F との楽しい時間を取り戻すべく F をゲームに誘ったと説明できる。そして F は、ゲームに誘われて参加することで、今までにはない家族の中の居場所感を得ている。また、夫婦二人だった頃や子どもが小さかった頃に確かにあったであろう夫婦の会話を再開させたことに、F も M も喜んでいる。

家族で過ごす楽しい思い出は、コツコツと積み重ねるものでしかなく、即座に手にいれられるものではない。家族に対する信念を理解しようとする時、今ここの現象だけでなく、時空間を越えた円環的因果律という過去との対話への注目も重要だといえそうである。

双方向 TEA の特徴と可能性と課題

最後に、開発された双方向 TEA の特徴と可能性と課題について、単方向 TEA と比べて考察する（表 3 参照）。

本研究における「単方向 TEA」と「双方向 TEA」の違いといえる特徴は、単方向 TEA では、調査対象者が環境要因を SD / SG を用いて受信する存在として記述されるのに対し、双方向 TEA では双方向 SD / 双方向 SG を加えて受発信する双方向な存在としても記述される点にある。具体的には、単方向 TEA では、類似したある事象を同様の立場から経験した人などが調査対象者となるが、双方向 TEA では、類似したある事象を異なる立場から経験をした人などが調査対象者となる。本研究では、不登校という事象を子と母と父という 3 つの異なる立場から複眼的に捉えたことになる。

双方向 TEA の可能性や利点としては、主に以下の 3 点を考えている。1 点目は、異なる立場の調査対象者がそれぞれ 1 名であっても、双方向の相互作用が可視化できる点である。これは、単方向 TEA の強みとなる調査対象者が 1 名といった希少な事象も研究対象となることが基礎にある。本研究の事例のように、研究の現実に

表3 単方向 TEA と双方向 TEA の関係

		単方向TEA	双方向TEA
特徴	HSI	類似したある事象を同様の立場から経験をした人など（先行研究：1つの立場に1~23名）	類似したある事象を異なる立場から経験をした人など（本研究：3つの立場にそれぞれ1名）
	環境要因	受信 (構成概念：SD/SG)	受信と発信 (構成概念：SD/SGと双方向SD/双方向SG)
可能性・利点		1) 基礎的であり初学者の第一歩となる。 2) HSI 1名など希少性のある事象も研究できる。 3) ある立場から経験について深く理解できる。	1) 異なる立場のHSIがそれぞれ1名であっても、双方向の相互作用が可視化できる。 2) 個人と全体という抽象度の高低を双方向に可視化することで時宜を得た支援の資料となる。 3) 学際的・領域横断的に使用できる。
課題		1) ある立場からの経験の羅列的記述から発展させるためにTLMGの理解や理論化の工夫が課題。 2) 環境要因を受信する存在として調査対象者が描かれる。	1) システム論的な視点や考察が必要。 2) 双方向TEM図／双方向TLMG図など更なる簡素化された可視化の工夫を期待。 3) 視点の絞り込みに深い背景知識が必要。

において、不登校経験家族がそれぞれの立場で研究協力者となることに同意するケースは希少である。そして1つの家族を対象とする場合、自ずと1つの立場（例えば母親）に1名の調査協力者となるので、1名から調査可能という単方向 TEA のもつ強みは、そのまま双方向 TEA にもいかされることになる。その意味で、貴重な事例や事象を複眼的視点から研究の遡上にあげる研究手法として、双方向 TEA の可能性は大きいといえよう。

2点目は、個別と全体という抽象度の異なるシステム変容を双方向 TEA 図で一枚の図として可視化できることによる可能性である。双方向 TEA 図であれば、同一事象を経験する異なる立場のアクターに対し、同時に時宜を得た支援が可能になる。双方向 TEA 図や双方向 TEM / TLMG 図は、どのタイミングでどのアクターが影響を与えているのかが分かるので、複数の支援者間で抽象度を上げつつ全体を俯瞰し、抽象度を下げて個別具体の支援策を検討できると考えられる。

3点目は、事例研究としての使いやすさと学際性の高さである。今回開発した双方向 TEA では、単方向 TEA の TEM / TLMG 図（図1）を基礎的枠組みとしているので、異なる立場でも共通した経験であれば重ね合わせる妥当性がある。更に、同じ枠組みで事例を積み重ねれば、不登校経験家族システムのパターンのようなものを見出せるかもしれない。事象を変えて、職場ハラスメントに関する組織システムのパターンのようなものを事例として分析することも可能であろう。同じ枠組みを使うことで、領域を超えて理解が進み、学際的な議論へと発展させられよう。

今後の課題としては、以下の3点が考えられる。1点目は、個別と全体を捉えるために、システム論的視点が必要になる点である。システム論への深い知識が求められよう。2点目は、双方向 TEA 図を作成するにあたり、3つの立場を扱うことで可視化の際の簡素化に工夫が必

要だった点である。例えば、行動レベルでの相互作用を焦点化するのであれば、TEM 図だけの双方向 TEM 図も可能かもしれない。さらなる簡素化ができるのであれば、そこへ向けた工夫が課題であろう。3点目は、双方向 TEA 図を作成するにあたり、複眼的視点になるだけに視点の絞り込みが重要になる点である。質的研究の質的部分が問われ、事象をとりまく背景知識を十分に得てからの分析が必要になる。これは課題というよりは、双方向 TEA の難しさかもしれないが、それだけに質的に深い研究へと進める一助となるのかもしれない。

本研究で初めて提示した双方向 TEA は、その可能性と課題自体も未知数である。これらは、今後の研究に委ねたいと思う。

付表 本稿で使用した略語一覧

略語	概念	訳語
BFP	Bifurcation Point	分岐点
EFP	Equifinality Point	等至点
HSI	Historically Structured Inviting	歴史的構造化ご招待
OPP	Obligatory Passage Point	必須通過点
P-EFP	Polarized Equifinality Point	両極化した等至点
SD	Social Direction	社会的方向づけ
SG	Social Guidance	社会的助勢
TEA	Trajectory Equifinality Approach	複雑経路等至性アプローチ
TEM	Trajectory Equifinality Modeling	複雑経路等至性モデリング
TLMG	Three Layer Model of Genesis	発生の三層モデル
VTM	Value Transformation Moment	価値変容点

・アルファベット順

引用文献

- 青野篤子（2016）男女平等意識の継承性——母と娘の語りを通して。福山大学こころの健康相談室紀要, 10, 51-59.
- 新川瑤子・杉山智風・熊谷真人・桂川泰典・熊野宏昭・小関俊祐（2020）不登校当事者の主観的視点から見た回復過程における記述的検討——ソーシャルサポートと家族機能に焦点をあてて。ストレスマネジメント

- 研究, 16 (1), 2-11. https://doi.org/10.50904/sutomane.16.1_2
- ブルーナー, J. S. (1998) 可能世界の心理 (田中一彦, 訳). みすず書房. (Bruner, J. S. (1986) *Actual minds, possible worlds*. Cambridge: Harvard University Press.)
- 花嶋裕久 (2018) ひきこもりの息子をもつ親の体験プロセス——ひきこもりへ移行してから危機的状況を脱するまで. 質的心理学研究, 17 (1), 25-42. https://doi.org/10.24525/jaqp.17.1_25
- 張替裕子 (2008) スクールカウンセリングにおける家庭訪問を活用した不登校支援——「支援を求めない保護者」への支援という観点から. 目白大学心理学研究, 4, 125-135. <http://id.nii.ac.jp/1514/00000137/>
- 廣瀬真理子 (2018) ひきこもり電話相談における家族ニーズの多元的分析——混合研究法によるアプローチ. コミュニティ心理学研究, 22 (1), 25-41. https://doi.org/10.32236/jscpjjournal.22.1_25
- 稲村博 (1994) 不登校の研究. 新曜社.
- 伊藤美奈子 (2002) 不登校気分の背景にある休み時間イメージと学校適応, 親友とグループの有無——不登校予備軍に注目して. お茶の水大学人文科学紀要, 55, 275-286.
- 伊藤茂樹 (1989) 『教育問題』の発見・処理と運動の展開——登校拒否を例として. 東京大学教育学部紀要, 29, 199-207. <https://doi.org/10.15083/00029789>
- 河合隼雄 (2009) いじめと不登校. 新潮文庫.
- 河合良 (2012) 不登校からの復帰における家族レジリエンス概念の検証——複線径路・等至性モデル (TEM) を用いて. 修士論文, 関西福祉大学大学院社会福祉学研究臨床福祉学専攻, 得津慎子 (指導教官).
- 菊地千夏 (2009) 不登校経験者の母親にみられるアンビヴァレンスの変容に関する一考察——学校に行く／行かないをめぐる相克に着目して. 子ども社会研究, 15, 193-204. https://doi.org/10.57410/jschildstudy.15.0_193
- 工藤宏司 (1993) 不登校研究の展望と課題. 大阪教育大学公民学会公民論集, 2, 29-54.
- 松本訓枝 (2004) 母親たちの家族再構築の試み——「不登校」児の親の会を手がかりにして. 家族社会学研究, 16 (1), 32-40. <https://doi.org/10.4234/jjoffamilysociology.16.32>
- 松本訓枝 (2007) 父親たちの家族再構築の試み——「不登校」児の親の会を手がかりにして. 家族関係学, 26, 61-72.
- 松坂文憲 (2010) 不登校経験者が語る“不登校経験の意味”——“自己資源化”の可能性の提案. 岩手大学大学院人文社会科学部研究紀要, 19, 39-56. <http://doi.org/10.15113/00013072>
- Miller, J. G. (1978) *Living system*. New York: McGraw-Hill.
- 文部科学省 (2020) 令和 2 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査結果の概要. https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf (情報取得 2020/12/23)
- 森田洋司 (1991) 「不登校」現象の社会学. 学文社.
- 森田洋司 (2003) 不登校—その後——不登校経験者が語る心理と行動の軌跡. 教育開発研究所.
- 村田昌俊・三浦努・武田公孝・林耕司・朝倉明美・伊藤健治・郡司竜平 (2000) 登校拒否 (不登校) 卒業生その後. 北海道教育大学 情緒障害教育研究紀要, 19, 61-68.
- 中釜洋子 (2010) 個人療法と家族療法をつなぐ——関係志向の実践的統合. 東京大学出版会.
- 中釜洋子 (2016) 家族システム理論. 中釜洋子・野末武義・布施晴枝・武藤清子 (編), 家族心理学——家族システムの発達と臨床的援助 (pp. 3-20). 有斐閣.
- 中川美保子 (2005) スクールカウンセリングについての一考察. 心理臨床学研究, 22, 605-615.
- 中地展生 (2012) 日本における不登校児の親グループ研究の文献展望——1990～2010年を対象に. カウンセリング研究, 45 (4), 239-247. https://doi.org/10.11544/cou.45.4_239
- 日本財団 (2018) 不登校傾向にある子どもの実態調査. https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2019/01/new_inf_201811212_01.pdf (情報取得 2022/7/8)
- 野口裕二 (2005) ナラティブの臨床社会学——物語としての臨床, 物語としての社会. 勁草書房.
- 齊藤万比古 (2011) 発達障害が引き起こす不登校へのケアとサポート. 学研.
- 斎藤環 (2006) 家族の痕跡——一番最後に残るもの. 筑摩書房.
- 坂田真穂・竹田真理子 (2000) 不登校への家族療法的アプローチの試み. 和歌山大学教育学部紀要教育科学, 57, 9-13. <https://doi.org/10.19002/AN00257966.57.9>
- 坂田真穂・廣井亮一 (2007) スクールカウンセリングに

- おける不登校への取り組み——援助課程における「父親」「母親」役割の試み. 発達教育学部紀要, 23-32. <http://hdl.handle.net/11173/888>
- 佐藤修策 (2005) 不登校 (登校拒否) の教育・心理的理解と支援. 北大路書房.
- サトウタツヤ (編) (2009) TEM ではじめる質的研究——時間とプロセスを扱う研究を目指して. 誠信書房.
- 瀬戸智也 (2001) 「不登校」ナラティブのゆくえ. 教育社会学研究, 68, 45-63. <https://doi.org/10.11151/eds1951.68.45>
- 卒田卓也 (2019) 不登校に対する親の変容プロセス (会員自主企画シンポジウム「TEA 研究の発達可能性について考える——理論と実践研究の事例から」). 日本質的心理学会第 16 回大会 プログラム抄録集. <http://www.jaqp.jp/conf/JAQP16.pdf> (情報取得 2021/07/27)
- 曾山いずみ・中釜洋子 (2012) 家族心理学における TEM (複線径路等至性モデル) の活用の可能性. 家族心理学年報, 30, 146-158.
- 菅佐和子 (2006) 思春期の子どもにかかわる教師と親へ. 児童心理, 846, 2-11.
- 田嶋誠一 (2001) 相談意欲のない不登校・ひきこもりとの「つきあい方」. 臨床心理学, 1, 333-344.
- 竹崎登喜江 (2006) スクールカウンセラーによる定期的な家庭訪問が教師の登下校対応に功を奏した事例. カウンセリング研究, 39, 281-289.
- 豊田香 (2015) 専門職大学院ビジネススクール修了生による生涯学習型職業的アイデンティティの形成——TEA 分析と状況的学習論による検討. 発達心理学研究, 26 (4), 344-357. <https://doi.org/10.11201/jjdp.26.344>
- 豊田香 (2022) 社会人大学院教育がひらく科学的知識創造——トリプルループ学習理論. 新曜社.
- 豊田香・相良好美 (2016) 複線径路等至性アプローチ (TEA) の生涯学習研究への適用可能性. 日本社会教育学会 (編), 日本の社会教育第 60 集——社会教育研究における方法論 (pp. 174-186). 東洋館出版社.
- 上村晶 (2018) 保育者と子どもの関係構築プロセスを可視化する試み. 桜花学園大学保育学研究紀要, 17, 13-30. <http://doi.org/10.20735/00000056>
- 渡部未沙 (2002) 母親面接を中心に担任との連携により展開した事例. 臨床心理学, 1, 202-214.
- 渡辺葉一・小石寛文 (2000) 中学生の登校回避感情とその規定要因——ソーシャルサポートとの関連を中心にして. 神戸大学発達科学研究紀要, 8 (1), 1-12.
- 和田美香 (2016) ひきこもり青年のきょうだい家族から自律していく過程——自律を援助するおよび妨げる社会文化的影響. 発達心理学研究, 27 (1), 47-58. <https://doi.org/10.11201/jjdp.27.47>
- ホワイト, M. & エプストン, D. (2017) 物語としての家族 (新訳版, 小森康永, 訳). 金剛出版. (White, M., & Epston, D. (1990) Narrative means to therapeutic ends. New York: W. W Norton & Company.)
- 山田哲也 (2002) 不登校の親の会が有する〈教育〉の特質と機能——不登校言説の生成過程に関する一考察. 教育社会学研究, 71, 25-44. <https://doi.org/10.11151/eds1951.71.25>
- 山岸竜治 (2018) 不登校論の研究——本人・家族原因説と専門家の社会的責任. 批評社.
- 安田裕子 (2015) 分岐点と必須通過点. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編), TEA 理論編 複線径路等至性アプローチの理論を学ぶ (p. 35), 新曜社.
- 吉井健治 (2017) 不登校と関わる十二の技. 鳴門教育大学研究紀要, 32, 107-122. <http://doi.org/10.24727/00027964>

◆謝辞

インタビューに快く協力してくださり、貴重な経験をお話いただいた調査協力者の方々に感謝いたします。

本研究を進めるにあたり、『TEA と質的探究学会第 1 回大会 (2022 年 10 月)』のポスター発表で、多くの方から貴重なご意見を頂きました。この場をお借りして、心よりお礼を申し上げます。

◆ Acknowledgements

The authors would like to thank Enago (www.enago.jp) for the English language review.

発行: TEA と質的探究学会
Japanese Association of TEA for Qualitative Inquiry
<https://jatq.jp/index.html>

JATQ

編集・制作協力: 特定非営利活動法人 ratik

<https://ratik.org>

 **ratik**